

在宅医療の充実のために 今、求められていること

医療の発展とともに、病院だけでなく在宅での医療を望む声が聞かれるように。しかし、その希望に応えられる環境は必ずしも十分ではない。解決には“本人の準備”“地域で支え合う仕組み”“医療・介護のサポート体制の連携”の3つが鍵を握っている。



時代とともに変化する医療

終戦直後の日本の医療は、医師を自宅に呼ぶ往診が一般的でした。大家族世帯が多かった時代には、病気に当たり前でも家族が世話をするのが当たり前で、8割近い人が自宅で亡くなっていました。

その後、車の普及とともに病院へのアクセスがしやすくなったことに加え、医学の進歩により病院では最新の機材を導入。医療を受ける環境が整ったことから、具合が悪くなったら病院へ行くのが主流になっていきます。昭和51年には病院での死亡数が自宅での死亡数を上回り、病院で亡くなるのが当たり前前の社会となっていたのです。

在宅医療に注目が集まる

一方で、病院で最期を迎えるのではなく、住み慣れた自宅での療養や最期を望む患者の声が増えるように。平成4年には医療法が改正。それによって、在宅医療が入院、外来に次ぐ第3の医療として位置づけられ、在宅医療の普及が進められてきました。

65歳以上が総人口に占める割合の高齢化率も年々上昇し、平成37年には本市も30%に迫る勢い。その中で、自分らしい最期を迎えるための支援や準備を進める必要があります。



在宅医療連携コーディネーター
手塚 美恵子 氏

意思を尊重できる最期に

医療の発展に伴い「病院に行けば病気は治る」という、患者や家族の病院への期待値は上昇。病気がなったら誰もが病院に行く時代へと変化していきました。しかし、なかには元々の健康状態に戻らないまま治療が終わり、医療と介護の二つの支援を必要として退院する場合があります。

全国でも6割の人は、医療や介護が必要な状態であっても、住み慣れた自宅で最期まで暮らしたいと望んでいます。自宅での最期を望まないと思えた人に理由を聞くと、家族に負担を

かけたくないからという意見が最多となっています。本音は最期を自宅で過ごしたいという人が大半なのです。病院は病気の治療をするところ。治療が済んだ後の療養の場所は、自宅や療養型の医療施設・介護施設など、自分で選択することが出来ます。住み慣れた場所で、社会生活をしながらの療養は、期待以上の回復の可能性もあります。

地域で支える仕組み作り

高齢化率の上昇とともに、今後ますます一人世帯や老々介護の増加が予想されています。最期まで住み慣れた地域で暮らすために、「地域力」を高めることも重要です。市内には既に見守り体制を整え、心身の健康を維持するために「いきいき百

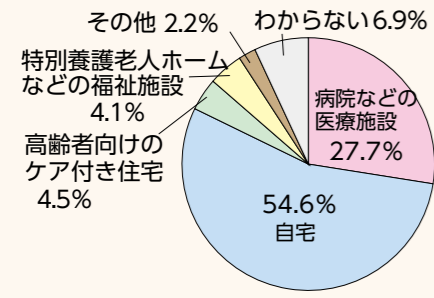
歳体操」や「生きがいサロン」など、高齢者がつながる機会を積極的に作り、運営している地域があります。地域内での交流が盛になれば、互いが程よい距離感で見守り、支え合うことも期待できます。こういった仕組みづくりを行う政や社会福祉協議会などがサポートしながら、「地域に適した支え合い」を目指していければよいと思います。

医療と介護の連携を

自宅での療養を選択した人への質の高い医療・介護を提供するには、医師や看護師をはじめとする医療分野と、ケアマネージャーやホームヘルパーなどの介護分野の連携が不可欠です。そのため、市では月に一度、両分野の関係者が一堂に集い、会議を開催しています。地域で活躍する多くの専門職が、それぞれの立場で日頃の悩みや業務内容を共有し、互いの事情を理解、尊重し合える関係をすでに構築しつつあります。互いに顔の見える関係が日々の業務に活かされて、より質の高いサービスを提供することにつながっていると思います。

最期を迎えたい場所

【高齢者の健康に関する意識調査】(内閣府 平成24年調査)



それぞれが望む最期を支えるために

在宅医療を望む人たちの希望を叶えるために何が必要となるか。在宅医療連携コーディネーターの手塚氏と、那須郡市医師会長の小沼氏に話を聞いた。

まずはかかりつけ医を持ち、気軽に相談できる関係づくりを—



那須郡市医師会
会長 小沼 一郎 氏

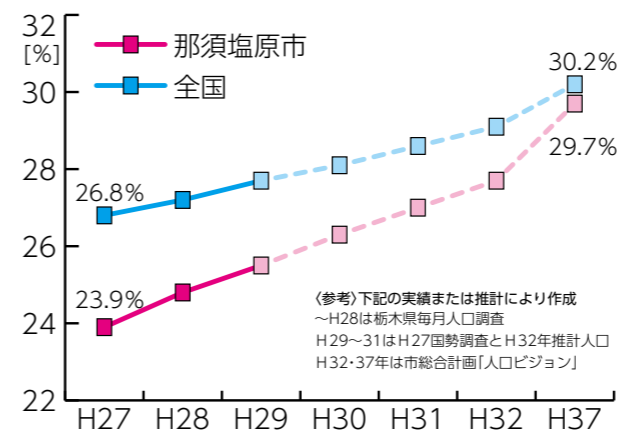
在宅医療を希望する場合、元気なうちから、かかりつけ医を持つことが大切です。かかりつけ医が自分や家族の身体の状態を一番よく分かっているという安心感があるからこそ、気がかりなことがあれば気軽に相談できます。かかりつけ医は、専門以外の身体の不調でも患者さんの疾患歴などを把握しているため、適切な専門医を紹介できます。

また、あらかじめ家族や身近な人に最期の過ごし方の希望を伝え、話し合っておく

ことも重要です。医師や看護師が患者さんのお宅を訪問して治療できるようになったとはいえ、在宅医療を実現するためには、家族や身近な人の力は不可欠です。だからこそ、医療や介護が必要になる前から周囲とのコミュニケーションを積極的に取っておくとよいでしょう。

自宅への往診も、外来で長年培ってきた患者さんと医師の信頼関係があってこそできるもの。まずは、自分の健康管理を安心して任せられる医師を見つけましょう。

本市の高齢化率の推移と将来推計



医療機関における死亡割合の年次推移

資料：厚生労働省「人口動態統計」より作成

